

18-4 授業解題

島名：グローバル・エシックス

教科（領域）：外国語科（英語）

単元（教材）：MAINSTREAM English Communication II Second Edition（検定教科書）

Chapter 7 Animal Intelligence

動物の権利について－動物実験の是非を問う－

対象：附属高校 2 年

授業者：佐古 孝義 先生

1. グローバル・スタディーズの観点からみた本授業の「強み」

○本授業は、MAINSTREAM English Communication II Second Edition（検定教科書）Chapter 7 Animal Intelligence を起点に、現代グローバル社会の問題の一つである動物倫理ないし動物福祉について英語で学習し、さらに、動物実験賛成派・反対派に分かれたディベートを行うという意欲的なグローバル授業実践である。

○ディベートの主題は、研究や企業の商品開発における動物実験の是非であるが、そこには、科学技術に支えられた現代社会における「エシカルでクリティカルな消費者」の育成という観点も含まれている。グローバル社会における商品の開発・生産・流通は、国や文化を超えた規模で営まれており、消費者がそのプロセスをしっかりと把握しながら消費行動を行うことはますます難しくなっているが、むしろだからこそ、そのような問題関心を重視し、かつ、それを外国語学習のなかに積極的に組み込んで展開する本授業は、グローバルな授業実践として高く評価できるように思われる。

○このような意欲的な取り組みである一方で、使用される教材は検定教科書収録のものを丁寧に活用し、事前準備を必要としないパラメンタリー（即興的）ディベートの手法を採用するなど、他の高校教育現場における高い実現可能性も備えた実践と評価できる。

2. グローバル・スタディーズのカリキュラム開発にむけて

○幼稚園から高校までのグローバル・スタディーズカリキュラムという観点から言えば、高校 2 年生対象の本授業は、その最終段階（仕上げ段階）に近い場所に位置づいている。グローバル社会の、あるいは人類共通の課題について外国語で学習し、それを踏まえて自分の意見を持ち、さらに他者と議論をするという本授業の構成は、まさにそれに相応しいと言えるが、逆に言えば、この水準の学習を可能にする基礎的力量的分析を進めることで、高校 2 年生以下のカリキュラムとのつなぎ（シークエンス）を構築していくという作業も、検討に値する課題であると思われる。

○事後検討においては、本授業は、理系生徒の方がより意欲的に取り組む傾向があるとの仮説が得られた。この点の追加的検討、さらに、仮に文系生徒がこの種の学習を苦手とするならば、それをクリアする方策についても、更なる検討の余地があるように思われる。